

故 名 誉 会 員 高 橋 嘉 一 郎 氏 を し の ぶ



昭和 43 年 10 月 4 日高橋嘉一郎君ゆく。君は明治 25 年 12 月 16 日仙台市の作太郎さん長男として生れ、仙台一中、二高の名門コースをへて東大土木工学科に進み、大正 5 年卒業、ただちに内務省に採用されて、北上川改修工事に勤務、大正 7 年内務技師に昇格、大正 13 年新潟土木出張所へ転任、その管内で難事業山積みの富山地方における直営工事をまかさされ、日夜心血をそそいでこれが完遂に挺身、その努力は今なお関係住民の間に語り伝えられている。すなわち立山大崩壊への砂防対策、水害激甚で知られた神通川の治水、東岩瀬港の更生、親不知および金沢の国道整備等に残された功績は大きかった。昭和 9 年抜擢されて内務省土木局の第一技術課づとめとなり、全国の利水とくに発電方面の監督指導の重責をおおされるにおよんで、君のすぐれた真価は、中央において一段と顕著に認められるに至った。君が担当の方面は、各省権限錯綜の難問題が多いにもかかわらず、君の公正無私の人柄と、たゆまざる熱意とによって、適切な解決に到達するものが多かった。たとえば東京都水道拡張の中核とみなされた小河内ダムの実現に対し、君の東奔西走によっての幾多支障の克服は、高く評価されるべきである。つぎに現行の多目的ダムの前身ともいふべき河水統制事業の創設も、また君の力による所が少なくなかった。昭和 14 年勅任技師のポジション第一技術課長の重職につかれて、河川、港湾、発電、利水および上下水道など水関係の技術全般を総覧することになり、その間、数次大陸に渡って、大豊満ダムと永安河官庁ダムの建設にも関与された。昭和 17 年内務省官制の改革に際し、国土局港湾課長を命ぜられた。昭和 17 年 3 月内務省大阪土木出張所長（後に近畿土木出張所長と改名）に栄進し、近畿地方の重要土木事業施行の大任を見事に果たされた。特に淀川の改修、琵琶湖の水利用、六甲山系の荒地地復旧等によって生ずる公共の福祉におよぼす効果は、永久後年に尾を引いている。

以上のごとく官界の技術方面に大なる足績を残して、20 年 4 月退官されたが、在官中の功績によって高等官 1 等、従 3 位に叙せられた。因にその後 42 年には旭日中綬章、また 39 年土木学会名誉会員に推挙された。

退官当時は、官界から業界への転進がきわめてまれなるにもかかわらず、君は業界の重要性を深く認識し、喜んで鹿島建設に迎えられて、20 年 12 月には常務取締役役に就任された。大阪支店土木部監督、企画本部副部長、土木総監督を経て土木部長の枢要なる業務を担当され、五十里ダム、上椎葉ダムを完成し、特にカスリン台風による利根川の大決壊締切の難工事に当り、総監督として自ら陣頭に立って輝かしい成功を収めた。かくして 31 年建設大臣賞が授与された。その年専務取締役となって土木部門を総師し、晩年健康を害してからも、相談役顧問として重視されていた。独り会社の責務を全うされたばかりでなく、土木学会関西支部長、河川協会理事、治水調査会委員、旧交会副会長として活躍され、また日本大学において後進指導にもつくされた。なお君は、特に建設技術の海外進出に関し、多大の熱意をかたむけ、前後 9 回にわたって外地へおもむき、足跡の至らざるはただ豪洲だけであった。君の人柄は、清廉にして温厚、信義に厚く特に「世話ずき」として友人や後輩から最も敬愛されて、明朗かつ達なる君の身边には、いつも春風ただよふの感があった。だがあのお得意のさんさ時雨や越中おはらも、今や聞くことのできないのは悲しい。しかし残されたお子さん達は、いずれも繁栄、長男克男君は国鉄東京第 3 工事局長、長女道子さんの夫君板垣正男君は岩倉組役員、次女智子さんの夫君市原松平君は名古屋大学教授の工博、まことに申し分なき土木一家である。嘉一郎君、もって冥すべきであらう。

[名誉会員・元会長 鈴木雅次・記]